

不登校予防研究部 研究報告（概要）

研究主題 市内小中学校の不登校ゼロを目指して
～小・中学校教員の実践アンケートに基づいた不登校未然防止の対策～

概要説明

平成 24 年度までの不登校予防研究部ではマッピング及びセブクロス法の研究を行ってきた。今年度は、より具体的な支援・対策を提供すべく、多くの先生方にアンケートに協力していただいた。その中から、日常の教育活動でどのような行為・行動が不登校の未然防止につながるかについての研究を行った。

- ①小・中学校教員のアンケートによる不登校対策の分析
- ②アンケート、インタビュー結果から具体的支援策の在り方

本研究の〈キーワード〉

- アンケート ○インタビュー ○積極的な取組（積極的因子） ○受容的な取組（受容的因子）
- 長期欠席者出現率（長欠率） ○長欠率 1%、A群・B群
- 受容的な取組と積極的な取組の差 ○日常の教育活動 ○小・中学校支援

I 研究主題

市内小中学校の不登校ゼロを目指して
～小・中学校教員の実践アンケートに基づいた不登校未然防止の対策～

II 主題設定の理由

1 不登校の定義

文部科学省では、「不登校児童・生徒」とは「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間 30 日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由によるものを除いたもの。」と定義している。

2 所沢市の不登校の現状

【平成 20 年度～平成 24 年度 小学校】

小学校	H 2 0	H 2 1	H 2 2	H 2 3	H 2 4	
児 童 数	男子	3 7	3 7	4 0	4 7	2 5
	女子	4 0	2 2	4 2	4 5	2 9
	合計	7 7	5 9	8 2	9 2	5 4

【平成 24 年度 小学校学年・男女別内訳】

小学校	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	合計
男子	1	2	3	5	7	7	2 5
女子	0	2	3	5	1 0	9	2 9
合計	1	4	6	1 0	1 7	1 6	5 4

【平成24年度】

- ・小学校では、ここ数年増加傾向にあったが、昨年度は男子、女子ともにおよそ半分に減少している。
- ・男子より、女子のほうが不登校になっている割合が高い。
- ・学年別で見ると、4年生から不登校傾向が目立ち始めている。

【平成20年度～平成24年度 中学校】

中学校		H20	H21	H22	H23	H24
生徒数	男子	113	137	153	121	140
	女子	153	135	157	137	133
	合計	266	272	310	258	273

【平成24年度 中学校学年・男女別内訳】

中学校	1年	2年	3年	合計
男子	31	41	68	140
女子	38	42	53	133
合計	69	83	121	273

- ・中学校では、平成23年に大幅に減ったものの、昨年度はまた増加した。
- ・過去5年間の統計をみると、ここでも女子の割合が高い。
- ・学年があがるにつれて、人数も増加している。
- ・小・中学校のつながりで見ると、昨年の不登校児童数・生徒数、小学6年生が16人に対し、中学1年生が69名とおよそ4倍になっている。

不登校のきっかけをみると、

	①学校に関わる要因	②家庭に関わる要因	③本人に関わる要因	その他・不明
小学校	22%	28%	37%	13%
中学校	30%	8%	60%	2%

となっており、その中で①学校と③本人に関わる内容をみると

	小学校	中学校		小学校	中学校
いじめ	0 (0)	3 (4%)	病気による欠席	4 (18%)	19 (11%)
友人との関係	6 (46%)	41 (52%)	あそび・非行	0 (0)	35 (20%)
教師との関係	3 (23%)	5 (6%)	無気力	5 (23%)	44 (24%)
学業の不振 (進路含む)	3 (23%)	14 (14%)	情緒的混乱	8 (36%)	31 (18%)
クラブ・部活不適應	0 (0)	9 (4%)	意図的な拒否	4 (18%)	10 (6%)
学校のきまり等をめぐる	0 (0)	10 (11%)	上記に該当しない	1 (5%)	36 (21%)
入学・編入・進級時	1 (8%)	7 (9%)	数字は人数、()内は割合		

① 学校に関わる要因

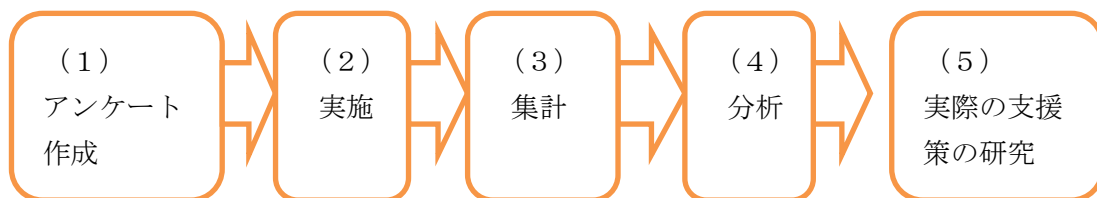
③本人に関わる要因

学校に関わる要因で見ると、小中ともに、友人との関係が要因になっている割合がほぼ半数である。また本人に関わる要因で見ると、小学校では、情緒的混乱や無気力、中学校では無気力、あそび・非行、情緒的混乱の割合が高い。実際には複数の要因が絡み合っていたり、原因が不明だったり、はっきりしない例も多い。

昨年度までの研究ではマッピング法、セブクロス法を生かし、児童・生徒の内面にふれ、支援者自身が児童・生徒を理解していくという研究を行っていた。今年度の研究員もセブクロス法を体験し、昨年度までの研究内容の良さにふれることができた。今年度は不登校に対応している教員に焦点をあて、まず市内の先生方が行っている日常の教育活動のアンケートを行い、そのデータをもとに、教員の不登校児童生徒に対する思いや考え、どのような行為や行動が不登校の対応、未然防止につながっているのかを分析することとした。さらにその結果をもとに、不登校児童生徒の未然防止に力を注いでいる先生方にインタビューを行い、その具体的・実践的活動を伝えることから不登校未然防止の対策につなげる研究とした。

III 研究の内容及び方法

1 不登校予防アンケートによる、効果的な支援策の研究



市内の小・中学校の先生方にアンケートをとり、その集計結果から、教員のどのような思いや考え、行為が不登校と関連しているかを調べる。研究員のいる中学校区を中心に行った。

2 各校先生方の具体的・実践的取組

1の研究結果をふまえ、不登校対策についての具体的・実践的な取り組みに力を入れていた先生方にインタビューを実施した。小学校4校、中学校5校、合計9名の先生方の日常の学級経営、授業から不登校の未然防止や、対策につながるであろうと考えられるものを取り上げた。

IV 実践研究

1 不登校予防アンケートによる、効果的な支援策の研究

(1) アンケート作成

児童・生徒にかかわる教員の意識の持ち方により、実際にどのような影響があるかを見るために、東京学芸大学小林正幸教授の「教師の意識と不登校予防の関連の研究」をもとに、研究員で次ページのアンケートを作成した。アンケートの前半では日頃の教育活動を振り返ったものを、後半ではもし不登校児童生徒を担当した場合どう対処するか、あるいは今までそのような児童・生徒がいた場合、どのように対処していたかアンケートを行った。

(2) アンケートの実施

市内中学校区を中心に小学校12校、中学校5校、担任をしている教員をはじめ、管理職、担任外、養護、支援員、相談員などにもアンケートを実施した。

(3) 集計

有効回答数 17校 387名

不登校未然防止のためのアンケート

日常の教育活動を振り返り教えてください

1 かなりそう思う 2 やや思う 3 どちらともいえない 4 あまりそう思わない 5 全く思わない

	質問事項	○で囲んでください
1	児童・生徒の変化を具体的に指摘して、その都度ほめるようにしている。	1 2 3 4 5
2	児童・生徒の我慢する力を育むために意識して指導している。	1 2 3 4 5
3	教育活動のあらゆる場面で児童・生徒の発言を引き出し、語る意欲を引き出そうとしている。	1 2 3 4 5
4	教育活動のあらゆる場面で児童・生徒が相互に関わる場面を設けるようにしている。	1 2 3 4 5
5	児童・生徒の様々な感情(快適・不快)も受けとめるようにしている。	1 2 3 4 5
6	児童・生徒の感情の表現を促すように支援している。	1 2 3 4 5
7	児童・生徒の発言を尊重し、否定しないようにしている。	1 2 3 4 5
8	児童・生徒が緊張を緩め、居たい場所に、居られる時間を作るように心がけている。	1 2 3 4 5
9	厳しく叱ることがあってもその子自身の存在を認める気持ちがある。	1 2 3 4 5

もしも不登校の児童・生徒の担任となったら、以下のことをどの程度行いますか。

1 必ず行う 2 場合により行う 3 どちらともいえない 4 あまり行わない 5 全くしない


1	保護者と連絡を取り合う。	1 2 3 4 5
2	本人と会い、話をしようとする。	1 2 3 4 5
3	同僚の教師や相談員に相談する。	1 2 3 4 5
4	本人の好きなこと、得意なことを探り、話題にするなど心がけて付き合うようにする。	1 2 3 4 5
5	本人をめぐる仲間関係に配慮するなど、安心できる居場所を作る。	1 2 3 4 5
6	登校時にはあたたかい声をかける。	1 2 3 4 5
7	不安や緊張や怒りや嫌悪などの不快な感情を言葉で表現できるようにする。	1 2 3 4 5
8	複数の教師でチームを作り、かかわる。	1 2 3 4 5

(4) 分析

①まず、アンケートの下段、「もしも不登校の児童・生徒の担任となったら、以下のことをどの程度行いますか。」の質問項目の1～3を積極的な取り組み(積極的因子)、4～8を受容的な取り組み(受容的因子)の2つに分類した。

積極的な取り組み(積極的因子)

受容的な取り組み(受容的因子)

1 保護者と連絡を取り合う。	4 本人の好きなこと、得意なことを探り、話題にするなど心がけて付き合うようにする。
2 本人と会い、話をしようとする。	5 本人をめぐる仲間関係に配慮するなど、安心できる居場所を作る。
3 同僚の教師や相談員に相談する。	6 登校時にはあたたかい声をかける。
	7 不安や緊張や怒りや嫌悪などの不快な感情を言葉で表現できるようにする。
	8 複数の教師でチームを作り、かかわる。

積極的な取り組み（積極的因子）と受容的な取り組み（受容的因子）のアンケート結果を各校ごとに点数化すると以下のようになった。

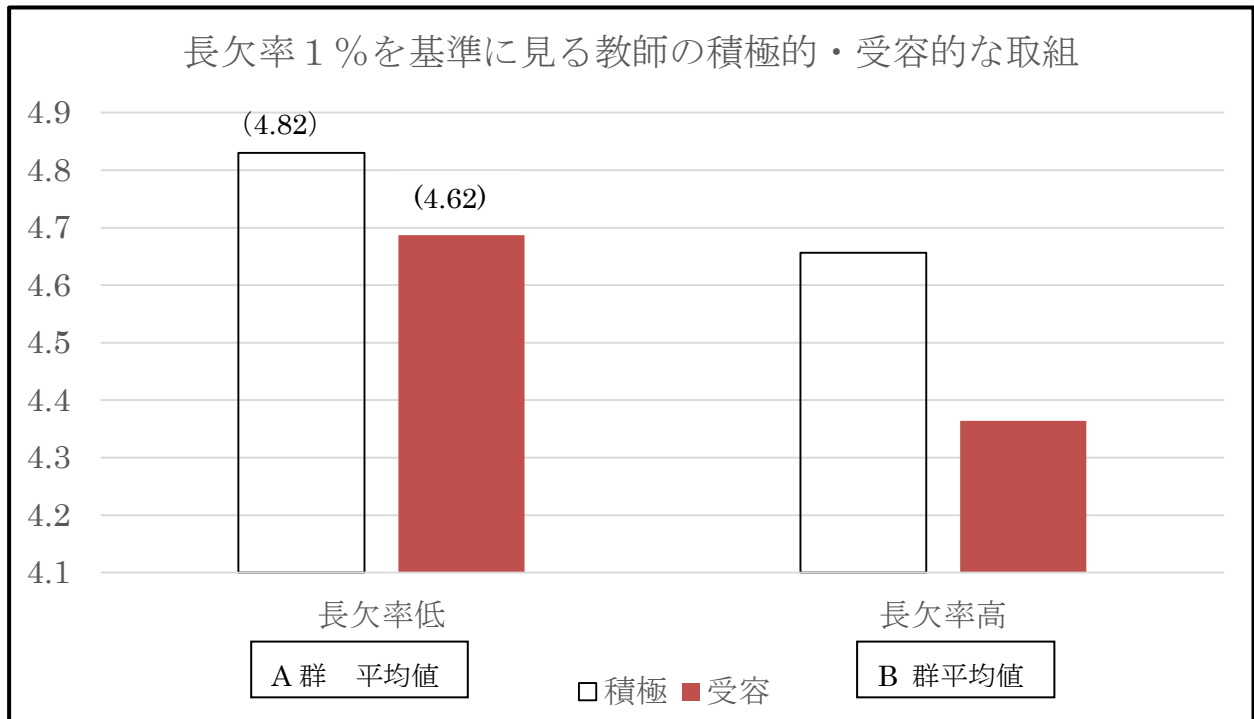
【A群】長欠率1%を基準に下回っている学校

学校	①積極的な取組 (積極的因子)	②受容的な取組 (受容的因子)	①-②	不登校児童生徒数 (病欠を抜いた数)	長欠児童生徒出現率 (長欠率)
A	4.805	4.718	0.087	1	0.0030
B	4.917	4.742	0.175	0	0.0000
D	4.625	4.688	-0.063	1	0.0014
E	4.945	4.783	0.162	3	0.0053
F	4.697	4.691	0.006	0	0.0000
G	4.934	4.710	0.224	1	0.0023
J	4.808	4.674	0.134	0	0.0000
K	4.858	4.514	0.344	0	0.0000
L	4.829	4.741	0.088	3	0.0030
O	4.715	4.621	0.094	1	0.0017
P	4.936	4.738	0.198	3	0.0037

【B群】長欠率1%を上回っている学校

学校	①積極的な取組 (積極的因子)	②受容的な取組 (受容的因子)	①-②	不登校児童生徒数 (病欠を抜いた数)	長欠児童生徒出現率 (長欠率)
C	4.516	4.300	0.216	7	0.0178
H	4.594	4.306	0.288	24	0.0311
I	4.580	4.261	0.319	13	0.0189
M	4.872	4.708	0.164	6	0.0144
N	4.786	4.371	0.164	32	0.0518
Q	4.590	4.238	0.352	15	0.0239





【グラフ 1】

《グラフ I について》

まず所沢市内の 47 の小中学校の中から 17 校を抽出し、その中での全体数あたりの長期欠席者の出現率（※以下、長欠率）を求めた。そして、その長欠率の 1%を基準に設定し、1%を下回っていれば長欠率が低い学校（A 群）、上回っていれば長欠率が高い学校（B 群）とした。

この長欠率と前述の教員に対して実施したアンケート（※以下、教員アンケート）との関係を示したものがグラフ I になる。このグラフを見ると、以下の特徴的な項目を示すことができる。

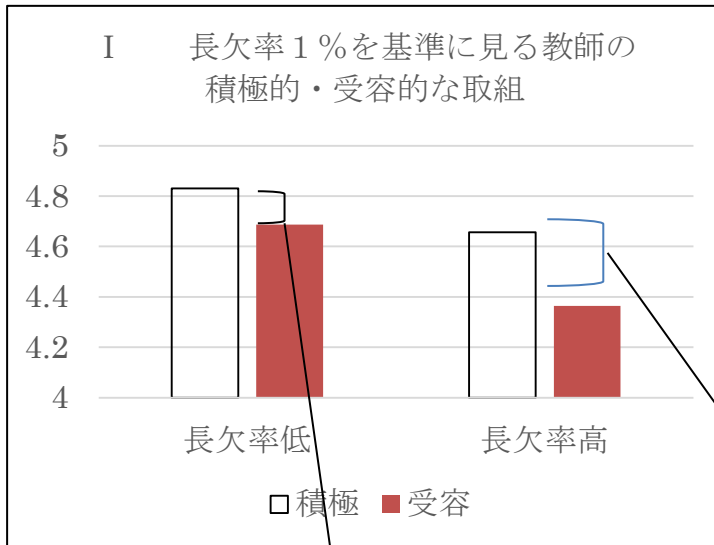
- (1) 長欠率が低い学校（A 群）は長欠率が高い学校（B 群）と比べて、教員アンケートからわかる積極的・受容的因子の割合がともに高くなっている。
- (2) 積極的因子はどちらの学校でも高い。
- (3) 長欠率が低い、高い学校に関わらず、教員アンケートからわかる積極的因子の方が受容的因子よりも高くなっている。
- (4) A 群と B 群では積極的因子同士での差よりも受容的因子同士の差が大きくなっている。
- (5) A 群積極的因子と受容的因子の差と B 群の積極的因子と受容的因子の差は B 群の方が大きい。

この 5 点の結果から考察すると、

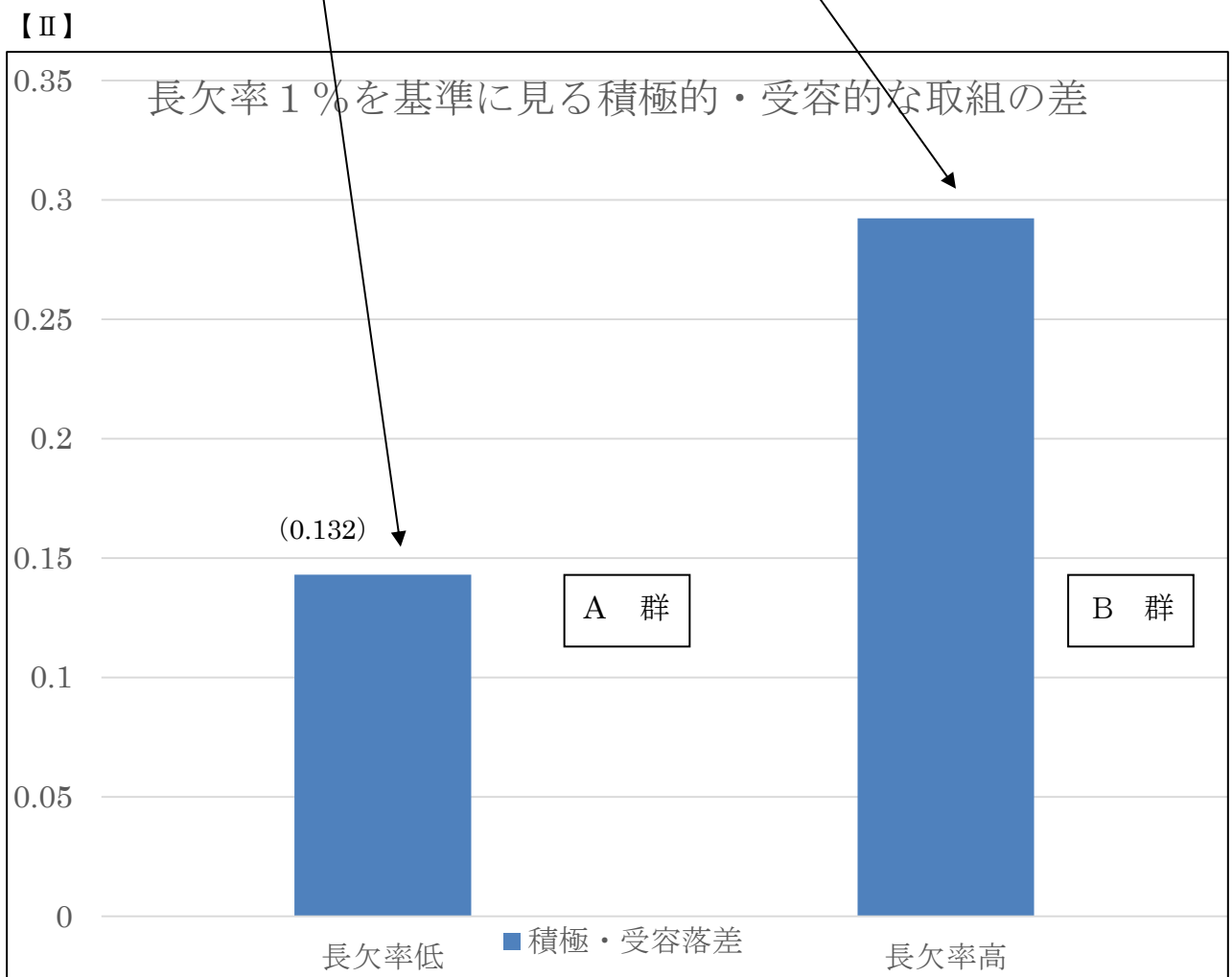
- ・不登校対策は積極的因子、受容的因子どちらも大切であるが、長欠率が高い学校（B 群）では積極的な取り組み（積極的因子）の生徒指導を行うことが多く、受容的因子を用いる割合が低い。
- ・長欠率が高い、低い学校に関わらず教員アンケートの中に示された受容的因子の割合を高めていくことが不登校の初期対応として大切なことである、と考えることができる。

《グラフⅡについて》

前ページで示した(5)の項目だけを抜き出し、さらにグラフにしたものがグラフⅡである。



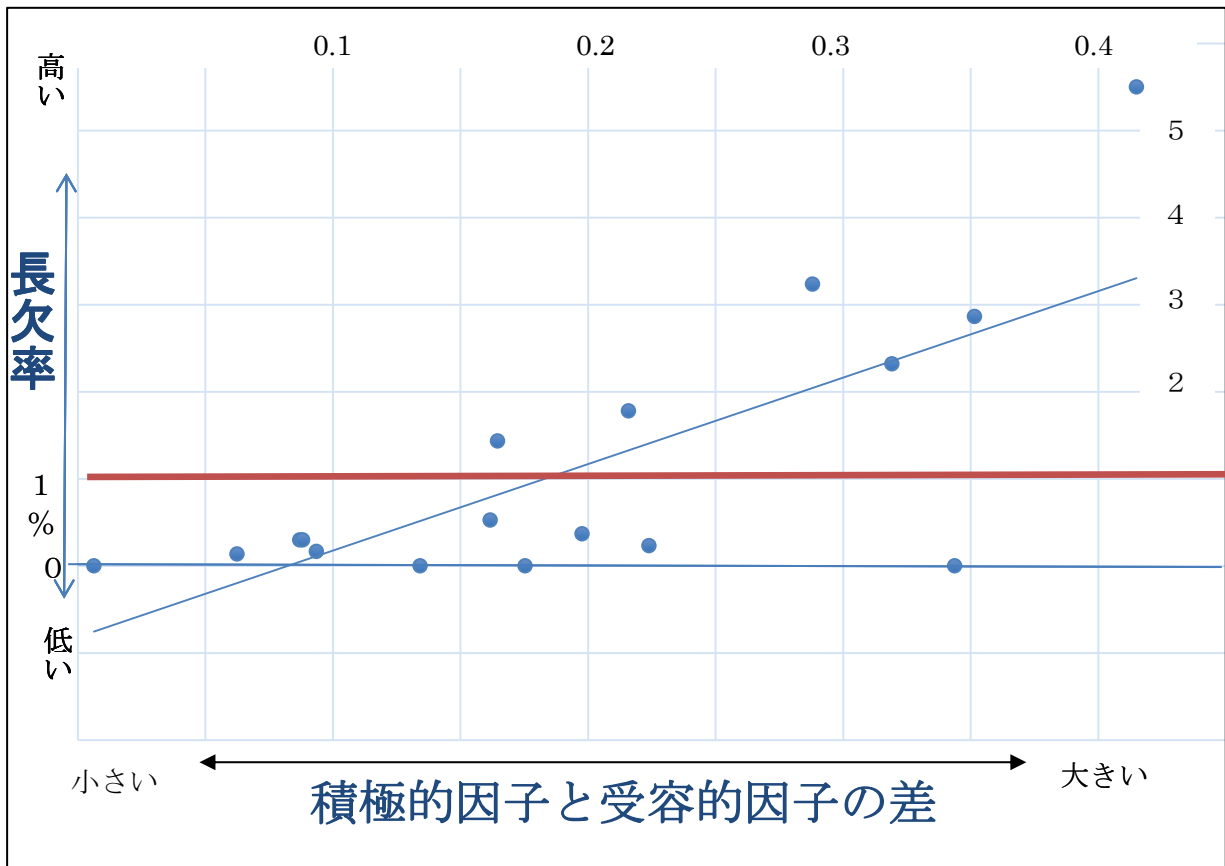
【グラフⅠ】



【グラフⅡ】

このグラフからは、【積極的因子-受容的因子=その差】がわかる。

A群の方がその差が小さい。この差を次のグラフで説明する。



【グラフⅢ】

《グラフⅢについて》

この積極的因子と受容的因子の差と長欠率の関係をまとめたものがグラフⅢである。このグラフは、縦軸に長欠率、横軸に積極的因子と受容的因子の差を設けたものである。縦軸では上に行けばいくほど、長欠率があがっていく。横軸の場合、右に行けばいくほど【積極的因子－受容的因子】の差が大きく、不登校対策で積極的因子中心に対応している様子が見える。このグラフを見ていくとやはり、積極的因子と受容的因子の差があればあるほど長欠率が高くなっている。つまり積極的因子と受容的因子の差と長欠者割合の関係は比例の関係となっていることが見てとれる。

この結果及び前述の項目③④から、市内の長欠者割合を低くしていく為の手立てとしては、積極的な取り組みをしつつ、それらを見直した上でもう一方の受容的因子に着目し、より受容的な対応にも力をいれてその差を縮めていくことが大切である、ということがわかる。

長欠率を下げっていくためには、

積極的な対応（積極的因子）－受容的な対応（受容的因子）

= 差

この差を小さくしていく

○受容的な対応（受容因子）の重要性について

ここまでグラフで示したように、不登校の対策としては、教員自らが積極的に動き解決に向かおうとする積極的因子だけの働きでは成り立たないことが分かった。それに加えて、相手のことを思い、相手の考えに合わせ、相手の気持ちを汲み取る姿勢、つまり受容の姿勢を底上げすることにより、対策として大きな成果が得られるのであると考えられる。

では、「受容の姿勢の底上げはどのように行っていけばよいのだろうか。」それを調査するために、私たち研究員は教員アンケートを振り返り、調べてみることにした。

教員アンケートに載せたものは8項目であり、うち5項目が受容的因子である。

- ① 本人の好きなこと、得意なことを探り、話題にするなど心がけて付き合うようにする。
- ② 本人をめぐる仲間関係に配慮するなど、安心できる居場所を作る。
- ③ 登校時にはあたたかい声をかける。
- ④ 不安や緊張や怒りや嫌悪などの不快な感情を言葉で表現できるようにする。
- ⑤ 複数の教師でチームを作り、かかわる。



この教員アンケートを行った結果、自分の属している学校が長欠者割合の高い、低い関係なく、どの教員も「**本人をめぐる仲間関係に配慮するなど、安心できる居場所をつくる**」が最も大切であるという考え方をしめしていた。また、次いで「**登校時にはあたたかい声をかける。**」「**不安や緊張や怒りや嫌悪などの不快な感情を言葉で表現できるようにする。**」と続いている。

この結果を前述のグラフで示した上述したように、1%の区切りを設け、長欠者割合が低い学校（A群）と長欠者割合が高い学校（B群）で分けて考えてみる。その結果、差が大きかったものは

- ① **本人をめぐる仲間関係に配慮するなど、安心できる居場所を作る。**
- ② **本人の好きなこと、得意なことを探り、話題にするなど心がけて付き合うようにする。**
- ③ **登校時にはあたたかい声をかける。**

の順であり、教員全体が不登校の対応として大切に思っている項目と大筋で一致していることが分かった。

つまり、これらの資料から予想した、「長欠者割合が高い学校の教員は、あまり熱心に不登校対策に取り組んでいない」ということはなく、実際に長欠者割合が高くなってしまっている学校の教員も意識、あるいは無意識のうちに「本人をめぐる仲間関係に配慮するなど、安心できる居場所をつくる」をはじめとした受容因子を重要視していることがわかる。しかし、それらを重要視してはいるものの、なんらかの原因が障害となり、実践できず対応が遅れてしまい長欠率1%を超えてしまっていると推察できる。一方で長欠率1%を超えていない学校については、自然に受容的因子を底上げできる環境が整っており、不登校が出てしまった場合でも教員が迅速な対応や処置、対策を講ずることができるのではないかと考える。

IV 各校先生方の具体的・実践的取組

1の結果から

- ①本人をめぐる仲間関係に配慮するなど、安心できる居場所を作る。
- ②本人の好きなこと、得意なことを探り、話題にするなど心がけて付き合うようにする。
- ③登校時にはあたたかい声をかける。

以上が受容的因子の中でも特に底上げが必要とされるものであった。そこで、受容的な実践として、実際、今までに不登校の児童生徒を担当したことがあり、その解消に力を注いできた先生方がどのように取り組んできたのか、また、どのような学級経営をしているかのインタビューを行った。

〈小学校〉

① 本人をめぐる仲間関係に配慮するなど、安心できる居場所を作る。


- ・担任1人では難しいが、色々なポジションの方に色々な関わり方をしてもらうことでその子が心地よくいられるようになる。
- ・授業が一番、教室が一番と考えている。本音はその子のためだけれども、そうとわからないように学級全体を歌やレクなどで盛り上げていく。
- ・学級の子供たちには、普段通り接するように話していて、場合によっては、「遊びにさそってあげて。」と声をかけるなどの配慮をしていた。

② 本人の好きなこと、得意なことを探り、話題にするなど心がけて付き合うようにする。

- ・児童の得意なこと、活躍できるような場面では、クラスの中で脚光を浴びるような機会を設けるようにしている。
- ・児童にできるだけたくさんしゃべらせる。不登校になる（なりそうな）児童は、学校の話をおもしろくはない。学校は楽しいところではない。だから、学校以外での楽しいことをたくさんしゃべらせていく。ただし、そこから学校の話にもっていく見極めは難しい。
- ・無理やり本人から聞き出そうとせず、必要に応じて電話をしたり、家庭訪問をしたりして母親などと他愛もない話をしながら、自然と話せるようになるまで待つ。無理をしなくていいということを本人に伝える。

③ 登校時にはあたたかい声をかける。

- ・さりげなく、「よく来たね。」「いい子だね。」と声をかけるようにしている。
- ・会話を直接する中でよいことを見つけていく。見たこと、したことだけではなく、直接言葉を交わした中で具体的なよいところを見つけてその場で誉めてあげる。
- ・久しぶりに来た児童に対して「明日も来てね」というように、明日につながるような発言はせず、あくまでもその日頑張ったことへの声掛けをしていく。そうすることによって、児童が小さな達成感を味わうことができる。
- ・不登校になった後、学校に来られたときも特別扱いはいらない。子供も担任に気を遣われているとそれがわかり、「自分が学校を休んだことは、先生に気を遣わせるくらい悪いことだったんだ。」と思わせてしまうと考える。さりげなく他の子たちと同じように関わるようにしている。
- ・落ち着いて「どうしたの」とやさしく語りかける。「何か困ったことがあったら言ってね。」と無理をしなくてもいいように声かけをした。



1日に1回は、どの子にも声をかけて担任と話す時間を作るようにしている。(自分から話しかけられない子やおとなしい子もいるので。)

欠席した際は必ず病院などの専門機関にみてもらったかを確認する。そうすることにより、児童の事を心配している、家庭と学校とのつながり、信頼関係を築いていくため。

日常の学級経営の中で

机間指導など個別の時間を多くとるようにする。そうすることにより、その子に自信を与えるようにしている。

日々の生活の中で給食の時間に班を回り、リラックスした状態の子供と話す中で休日の過ごし方や素の子供の様子を知ることができる。

正しいことに味方してあげる。弱い子でも正しいことを見極め、正しいことに味方してあげる。ケンカはすぐにとめない。十分に感情をだしあってから、時間をおいて考えさせる。

子供たちの関係を作る為に、休み時間にクラス皆で一緒に遊ぶなど子供たちの関係作りに努めている。



小学校では、不登校児童の人数も少ないため、対策もふくめ日常での学級経営に関する意見が多く出た。不登校だけに限らず、普段からの学級経営として、意識して行っていることが、不登校未然防止につながっているのではないかと考えられる。

〈中学校〉

① 本人をめぐる仲間関係に配慮するなど、安心できる居場所を作る。

- ・本人が学校に来たくない、来られない要因は、人間関係の問題が大半を占めている。教室が居心地が悪いのであれば、教室に行かなくてもよい。
- ・期末テストなどで成績が良くなかった生徒を集め、補習を行った。これを行うことによって「自分もできる！」という自信や教員との関係の向上によって学校での居場所をつくることができた。

- ・人間関係でトラブルがあった場合

- ・その生徒間同士
- ・間接的に関わる友達を交えて
- ・教員を交えて



の3段階を選ばせて自己解決能力を育むと共に、それぞれの居やすい環境づくりをしていく。

- ・人に礼を伝える時、周りをしっかりと見ていないとできない。このような具体的で些細なことを相手に伝えることでクラスの居場所ができてくると考えている。
- ・普段の関わりの中で宿題をやってくる、ノートの字が丁寧、忘れ物をしない、簡単な一つ一つのことができたならば必ず声をかけ、その存在を認めてあげるようにする。そうすることによって、その子が達成感や満足感、クラスでの居心地の良さを感じられる。そして、そこからまた新しい人間関係も期待でき、クラスの中の居場所もさらに増えていくことになる。
- ・一定の生徒が強い発言力を持たないクラス作りを心がけている。

② 本人の好きなこと、得意なことを探り、話題にするなど心がけて付き合うようにする。

- ・本人が絵が得意だとしたら、日々の気持ちを好きなものの絵で表現させるなどの工夫をしている。
- ・その生徒と関わる期間や目標に向かって見通しを持ち、それに向けて気持ちが自然と向くようにしていく。

③ 登校時にはあたたかい声をかける。

- ・登校できたときには、「どうだった?」「今日は、来てくれて嬉しかったよ。」と声をかけるようにしている。話をしたそうな様子が見られたら「おしゃべりしていく?」と声をかける。
- ・失敗してしまったこと、間違ってしまったことに対して、親の見方を交えながらその場面の良いところ、悪いところを一つ一つ整理し、「本当はどうすべきだったか」を生徒に問う。そうすることによって、次の行動への判断やきっかけとし、その成長を見取る材料としていく。
- ・(欠席が続いた場合) 欠席 1 日目…電話連絡 2 日目…「明日も大変かなあ…。明日も、もしお休みだったら先生の顔を忘れられたら困るからお家にいってもいい?」ということが多い。←おどしにならないように。私が顔を見せたいと言うようにしている。
- ・無理に嫌なことや、不登校の原因を聞き出そうとすると余計口を閉ざしてしまいがちになる。健康観察などでそのような兆候を察知したら、その生徒に「何かあった? 話せそうなら話してね」と自分から話してくれるのを待つようにする。
- ・嫌なことを引きずっている場合は、1 度忘れることができるような出来事や授業を展開して

いく。また、率直な感情をノートに書かせ、将来的な感情のコントロールの方法も身に付けていくことが効果的である。

小・中ともに、児童生徒に対し積極的な取り組みをしつつ、①②③の例のような受容的な取り組みの姿勢を取り入れ、積み重ねていくことが不登校児童生徒を生まない、増やさないための対策になっていくのではないかと考える。

さらに上記以外でも、中学校では不登校生徒の数が多く見られるため、先生方が意識的に行っている日常の未然防止と、実際の対策について意見は多くあった。積極的な取り組み、受容的な取り組みを含めた、日々の生徒への接し方、そしてその不登校傾向への対策としての聞き取った意見を以下に載せる。



《日常の学級経営で》

- ・一人一人に、日々の振り返りを書かせているノートや学級日誌、自分でつけているメモ書きなどから子供たちの様子を知るようにしている。
- ・中学を卒業したら社会人である。日々の生活の中で、子供たちに言っていること。…学力は、あったほうがいい。でも、『挨拶をする。時間を守る。ありがとうが言える。困ったときは「助けて。」と言える。』ということは、絶対にできた方がいい。
- ・人に不快な思いをさせない、わがままは許さないということには、こだわって指導している。子供同士の人間関係づくりを大切にするように努めている。(お互いに個性を認め合えるようにする。お互い自分のことを話せる雰囲気づくり。)
- ・他の人を不快にさせるのはダメなので、事実については厳しく叱る。ただ、その子の存在を否定する言葉は使わないようにしている。
- ・中学校で自分が担当している教科は、週1時間しかない。1日のうち関わる時間は、担任していても1時間あるかないかである。担任していても不安な気持ちがあるので、子供たちの意見を聞いておきたい。
- ・まわりの児童生徒に対しても必ず一つの行動に対して一つの言葉かけが必要である。「君たちがいるから、先生はこれができている。」と声に出して伝えることで、不登校でない児童生徒にもクラスの中で役割や達成感を与えられ、「クラスのために」という気持ちが強くなっていく。

《不登校傾向がみられたら》

- ・不登校傾向の児童生徒の特徴は、自己決定力・自己肯定感が低い事や潔癖すぎるなどが多い。
- ・学校の友だちと円滑な人間関係を築いていくためにも、その子のまわりの人間関係は必ず担任が把握するようにする。例えば欠席連絡カードの友だちからの記入欄、休み時間での何気ない集団関係、そのなかでの発言などである。その子自身のノートの字の大きさ、筆圧なども大きな判断材料となる。以前と比べて筆圧が弱くなっていたり、

字が小さくなっていたり、乱雑になっているときは、何かに気づいてほしい児童生徒からのサインである。

- ・心配なことがあったら本人と話をする。
- ・不登校になったら、原因をどのように探っていくか。…本人と話す。保護者や部活の顧問からの聞き取り、日々の振り返りを書かせているマイノートや学級日誌、自分でつけているメモ書きなどを参考に探る。
- ・不登校の傾向がみられるとき、最初は保護者と密に連絡をとるようにしている。本人を取り巻く大人がいろいろなことを言うと混乱するので、歩調を合わせるという目的である。保護者と歩調が合わないときは、本人を大切に考えるようにしている。
- ・学校が嫌なことと、生活が乱れることは別である。「朝は、ちゃんと起きて1日1回は制服を着なさい。」と伝えている。



《不登校の対策として》

- ・不登校傾向の児童生徒への対応は担任一人ではできない。学年、顧問、相談員の先生などの協力があってよい対応ができています。
- ・すべて担任が背負い込むのではなく、ケース会議などを適宜開き、学校、学年単位で不登校の対応に取り組んでいけるようにする。例えば、その兆候が大きい生徒が保健室に行ったときに『たまたま』教育相談、あるいは、相談員の先生が保健室を訪れるというシチュエーションも可能となる。また、良い言動をした場合に、直接ではなく、部活の顧問など、その児童生徒に近い存在の先生に代わりに褒めてもらうことも効果的である。
- ・ケース会議などで「どこの段階までにいつまでにもっていくか」といった見通しを立て、周りの先生や親も共通で理解し、同じ方向に舵を取っていく必要がある。また、そのゴールに到達するまでも、必ず達成できそうなスモールステップを設け、一つずつ認めていくことが大切となってくる。そして、家庭環境を考えながらできるだけ親に伝え、できるだけ家庭の情報を把握しながら、児童生徒を中心としてサポートしていく体制をとることが大切である。
- ・不登校を研究しているからと言ってカウンセラーではない。必ず外部機関と協力して、その子の対応に応じていく必要がある。また、個別に不登校の児童・生徒の家に訪問した際、不用意な私的見解は控え、学校代表として、学校の方針を伝えることに徹することが大切である。そうすることによりトラブルの回避や担任の負担軽減にもつながる。



V 研究のまとめと今後の課題

1 成果

(1) 不登校予防アンケートについて

先生方一人一人の意見を学校全体として一つに集約し、それを不登校児童生徒数と関連させて、「これをすれば不登校の状態が改善していくのではないか」ということをしっかりと数字で示し、何が効果的なのかを示すことができた。学校では、何かをしなければならないという意識が働き、積極的な行動を先行しがちだが、それと同時に、日常的な受容の姿勢も不登校対策として十分に機能していることがわかった。さらに、長欠率との関係では、積極的因子と受容的因子の差が、長欠率につながっていることも、データから判明した。実際の教育現場で、数値を意識して事細かに対応していくことはないが、教員の意識、行動の違いがどのように不登校に結びついているかを示すことができた。

(2) 各校先生方の具体的・実践的取組インタビューについて

インタビューしたものは、すべて先生方の今までの経験を積み重ねてきた中での実践である。「このようにしたらいいのでは。」ではなく「具体的にこのようにしてきたらよかった。」という結果をもとにした回答である。そのような、生の声や経験を集約して残せたことは、今後の不登校対応に生かしていけるのではないかと思う。

アンケートの結果や先生方へのインタビューから給食の時間や1日1日のふりかえりなど日々の僅かな時間の関わりの中でいろいろな面や子供の情報を知ることができることがわかった。また、その情報を細かく見ていくことで、児童同士の関係や不登校傾向解決の糸口が隠れていることがある。今までの不登校に特化した、あるいはケースを吟味し、選んで行った対応ではなく、日頃から実践していることをインタビューから聞き出し、文書にすることにより、初期段階のマニュアル的な要素を含むことができた。また、小学校・中学校の対応に着目し、対応の違いや変化、それぞれの対応の良さに触れることができた。

2 課題

- ・今回の研究員は小学校教員のみであった。研究を進めていく中でも、中学校の実情や連携など必要不可欠な情報交換をその場でなかなかできなかった。中学校の教員がいたら、学校全体での不登校生徒に対する具体的な取り組みや実態などがわかり、更に研究にも幅が出たのではないか。

・実践を取り入れて

今回アンケートと、インタビューという形で研究を進めたが、対象となる児童の姿がここにはない。数値上での効果的な支援策の幅を広げ、たくさんの先生方の実践を実際に行って、効果があってこそその研究である。そのための事例研修を行い、再度検証していく必要がある。

3 次年度へ向けて

来年度は、今年度の研究をもとに、児童・生徒の実態に即し、より効果的な具体策を実践していくとともに、小学校教員だけの研究ではなく中学校との連携を深め、事例研修を行い、不登校ゼロになることを目指し、研究を続けていきたい。

今年度、小林教授の指導の下で研修を重ね、所沢市内の学校ごとの不登校の現状が見えてきた。年度ごとの不登校数のデータだけでは、見えなかったことが、中学校区で実施した教職員向けのアンケートやインタビューを通して、実情が見え始めてきた。それによって、不登校とは年間30日以上欠席のある児童・生徒を対象にしている現状の把握の仕方（例えば、欠席理由が、腹痛の場合でも家庭によって、医療機関を受診するか否かには、差があるということなど）この事例一つをとっても、今まで家庭から欠席の連絡があれば、そのままの疑いもなく承諾していたことに対して、初めて疑問を感じた。また、病気で欠席が数日続く場合には、別の手だてが必要だという新たな視点を与えてもらった。さらに月3日以上欠席児童・生徒に着目することにより、学校内での不登校予備軍、あるいはその傾向を持つ児童を事前に把握し、気にかけてあげられる、ということに気づかされた。

日常では、表面的に見えている問題への対応のみに追われ、問題が起きてしまったからの対処療法になってしまっている現状がある。しかし、不登校予防という観点からは、日頃の学級経営、牽いては教職員の意識を変えていくことこそが、不登校予防に求められていることだと改めて感じた。

不登校未然防止の観点と、不登校になる初期の対応について、今年度の研究を少しでも参考にしていき、今後も所沢市の不登校予防研究が進み、市内の子どもたちが健やかに成長するための一助になることを心から願う。